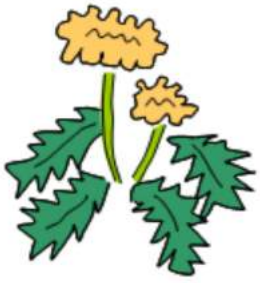
たんぽぽ
NO.427
R5年3月1日
-発行-
〒869-1217
熊本県菊池郡
大津町森54-2
社会福祉法人
三気の会
三気の里
☎096-293-8100



魂の継承

理事長　松田　健

個人的なことで申し訳ないのですが、昨年の3月に母親が90歳で亡くなりました。高齢者の施設に13年入所していました。親不孝であった私は、せめて週に1回会いに行くことがやっとでした。60キロ離れていたので高速道路で通いました。行くと喜んでくれたので嬉しく思いました。頭ははっきりしており、昔話や親戚との関係（〇〇さんとはどういう関係になるのか）という質問をすると的確に答えてくれていました。10年ぐらいして、コロナ感染の流行がはじまりました。面会はできなくなりました。会えないので、2週間に一度行き、手紙と差し入れを職員の方に渡し、近況を尋ねるようになりました。感染者が減ったときに面会が可能になりましたが、会ったのは三年間で5～6回程度でした。亡くなる時には間に合いました。最期を看取ることができました。

三気の里においても同じように制限と緩和を繰り返しました。コロナ前には毎週帰宅されていた方もおられ、2週間に一度の方が一番多く、月に1回の方が次に多かったのですが、突然帰宅ができなくなり、最長で5カ月近く帰宅できませんでした。

支援者として本人さんの気持ちを想像できたでしょうか。寄り添う必要性をよく耳にしますが、本当に寄り添うことはできたでしょうか。また、親御さんやごきょうだいの気持ちを推し量ることはできたでしょうか。日々自問自答を繰り返しています。

昨年8月に熊本県知的障がい者施設協会の研修・倫理委員会で6年間一緒に仕事をさせていただいた氷川学園の施設長であった西坂千賀子様が心不全でご永眠されました。出身高校も同じであったためよく飲み会でもご一緒させてもらいました。利用者さん本位の考え方で仕事をされていました。まだまだ多くのことを学びたかったので非常に残念です。多くの方を惹きつける力があり、西坂組と勝手に命名しておりました。私もその一員だと勝手に思っていました。みんなのショックは尋常でないぐらいに大きく時間が経過すると共に大きくなってきます。そして、どんどん寂しくなります。

私は、よく西坂さんを怒らせていました。しかし、一回だけ喜んでもらったことがあります。氷川学園の機関誌で数名の部下の方が文章を書いておられるのを見て、「すごくいい文章ですね。部下の方が育っていていいですね。」と西坂さんに言うと、「ありがとう。私の自慢なの。」と最高の笑みを浮かべて言われました。優秀な職員が多い施設なので、「西坂さん安心してください。西坂さんの魂は必ず継承されます」と言いたいです。

私にとって偉大な二人の死によって、自分を見つめ直すためにもと思い、熊本城マラソンの出場を決意しました。練習しました。しかし、断念しました。当事業所のグループホームにおいてコロナに感染された方が数名おられ大会の日までに収束しなかったためです。

「私はやはりコロナが嫌いです。会いたい人と会えません。共存もしたくありません。」母親にも西坂さんにももっともっと会いたかったです。でも、熱意をもって語ってくれる、教えてくれる、褒めてくれる、注意してくれた人は自分の中で永遠に生き続けます。

3月

１班　「変化」

1班に所属して16年の月日が流れ、20代であった私も40代に突入しました。その間、将来を見据え実家近くの施設やグループホームに移行した方、新しく利用をスタートされた方など、多少の変動はあったものの、殆どの方と16年のお付き合いになります。今回は、皆さんの「変わったこと、変わらないこと」について紹介したいと思います。まず変わったことに関して、髪の質感です。白髪や薄毛が増え、毎日の入浴支援でも髪の衰えを痛感します。そして、最も顕著なのが胃腸の衰えです。過去には伝説級の大食いエピソードを持つ皆さん、勢いこそ衰えないものの、量が減り、特に食べた後のダメージが大きいようです。次に変わらないことですが、純粋な笑顔と寝顔です。嬉しい時には笑い、日中上手くいかないことがあっても寝顔は穏やかです。今年度もたくさんの笑顔を見せて頂きました。最後に、コロナウイルスなど関係なく、家族との繋がりを変わらず大切にされています。今後も皆さんの成長を見守って行きます。

業務課長　本田　誠

２班　「支え合う」

私達支援員の仕事は、利用者の方々の生活や健康、活動（作業や余暇）等、暮らしがより充実したものになるように支えることだと思っています。先日、班の支援者の会議の中で、作業活動がよりスムーズかつ効率よく、そして収入を上げる為にはどう進めるべきかを考えました。2班は、比較的キャリアが浅い支援員メンバーが多いチームですが、異業種、異職種の経験を持った支援員もおり、それぞれの思いや考えの中から、利用者の方を支えていくための意見を出し合いました。その中で、利用者の方それぞれのことを知ること、そして皆さんが考えていること、感じていることを私たち支援員が感じ取ることを大切にする。更には、利用者の皆さんの頑張りをしっかりと評価できるようになる等のことをチームの意識することとして考えました。作業をテーマとした話合いでしたが、作業に留まらず利用者の方の暮らしを支えることに繋がることだと考えます。利用者の皆さんの頑張りをしっかり伝わる形で評価し、「頑張って良かった！」「もっと頑張ろう！」と思える伝え方が出来るようになりたいと思います。

支援課長　岩田　幸児

3班　「温まる企画」

今年度最後（2月実施）のレクリエーションの企画を任された支援員のHさん。皆さんに楽しんでもらうことを念頭に悩みに悩んで出されたアイデイアのひとつが「温泉」でした。企画書を見たスタッフの反応。若手スタッフからは「新しいね」若くないスタッフからは「懐かしいね」との声。ここ数年、コロナの影響でレクリエーションの形も大きく変わっていました。そんな中で今回の「温泉案」。つい10年ほど前は、お決まりコースだっただけに懐かしさとある種の新鮮さでレクリエーションに臨むことができました。

当日、普段は浴槽からすぐに出ようとするＩさんが肩までゆっくり浸かりフーっと一息。Mさんも満面の笑みで、こちらが促すまで温まっていました。Tさんは露天風呂がお気に入りの様でした。皆さんの至福の表情にたくさん出会えました。終始、緊張気味の表情だった企画者のHスタッフ。楽しみを考える喜びと、アイディアを形にすることのやりがいを学んだ1日になったのではないでしょうか。

主任　森田　康之

4班　「不適切という支援」

怪我等を理由に一時的に動きを制限されたことで動き辛くなる、体重増加等から今まで取り組まれていたことも「きつい」「しんどい」と言われて動くことを嫌がられ不機嫌、また感情的になられる方がいます。悪循環であることは分かりながらも支援をしていくのは難しいものです。支援する側としては、躊躇してしまいます。しかし見過ごしていくわけにはいかず、立ち上がり、歩行を任せると再び転倒に繋がりますので、必ず付き添い、介助、見守りを行いますが、自分で手に取れる場所に歯磨き道具等必要な物を置き、出来るだけ自分で手に取り行えるように支援します。靴下を履く事やズボンの上げ下ろし等も随分苦労され、スタッフ任せになりがちです。引っ掛かりなどは手伝いますが基本的には自分でされるのを見守り、手を出さずに待ちます。時に上手くいかず、すぐに諦めたり、苛立たれたりしますが出来そうであれば、出来ることは「自分でしてください」「もうちょっとです」という言葉の支援を行います。

何でもしてくれる親切な支援者ではなく、不親切な支援者ですが必要だと思っています。

主任　石丸　直美

5班　「時代」

昭和生まれの多い入所中心の班から、当時「通所」と呼ばれていた5班に移動しました。この5班で利用者と作業や行事を行っていく中で、昭和生まれの利用者さんと、平成生まれの利用者さんの違いを感じるようになりました。多々ある中で大きく違う点は、スマホやパソコンを使うことができる方が多いというのが感想としてあります。全国規模でみるとそうではないかもしれませんが、三気の里においてはそのように感じます。

活動の合間に音楽を流す、ラジオ体操をする。アート活動のアイデアを探す。いろんなことがスマートフォンやパソコンで可能となり、活動の幅が広がるだけでなく、視覚的にもわかりやすいツールになっています。時代に合わせたツールを使い、より便利により楽しく活動展開していく必要があると思いました。

主任　佐藤　和也

療育雑記

「忘れてはいけない」
スタッフの声
～支援者の立場より～

主任　森田　康之

当時、私は前震（14日）で避難していたGH入居者と共に居室棟から少し離れたアイデアルームにて入居者の皆さんと就寝していました。4月16日午前1時過ぎ、突然の揺れに夢か現実か、よく分からない状況で目を開けました。聞いたことのない音や、壁が動いたり、テレビが落ちたりする光景が目に入りました。瞬間、すぐそばで1階の居室の利用者さんの大声が聞こえます。まだ揺れは続いています。声の方に目をやると、逃げ場を探し居室を飛び出して、玄関で耳を塞いでいる利用者Mさんの姿がありました。私たちのいる部屋へ誘導して、布団へ潜り込ませるとMさんに「大丈夫、大丈夫」と何度も繰り返しました。伝わっているか、本人に理解できていたのか分かりません。ただ「大丈夫」と布団の中で、地震の揺れに怯えているMさんに言い続けていました。

次第に揺れが落ち着き、現場にいたスタッフとこれからの動きについて確認をしました。誰もこのような状況を体験したことはありません。揺れが落ち着いたといっても、断続的に余震が続いています。屋外へ避難することが決定したときに、自宅から複数のスタッフが駆けつけてくれました。自宅で被災して、短パン姿のまま現場へ駆けつけた課長M。主任Iは現場の把握を瞬時に行いGHの方々の避難へと移りました。避難中、指揮をしていた主任Hは最後まで利用者さんの傍に付き添って二重事故を防ぎ、支援員Kは冷静かつ落ち着いた口調で利用者さんを安全な場所へと誘導していました。女性利用者を中心に把握していた支援員Mは戸惑う利用者に対して手書きのメモで状況を伝えていました。それぞれのスタッフが役割毎に避難誘導を行いました。上空を飛び交うヘリコプターの音や絶えず聞こえるサイレン、町内放送の中で、全利用者の避難が完了したとき、ふと時計を見ると深夜3時を回っていました。

本震から数ヶ月経過した頃から利用者のTさんは睡眠のリズムが不安定になりました。眠りが浅く、夜中に何度も居室から顔を出します。生活環境は地震前と変わらず、通常の生活日課にも慣れ始めた時期です。様子を観察していくとTさんは地震前と比べて周囲を見回すことが多くなったように感じました。ある時、生活棟を移動中に一点を真剣に見つめるTさん。なんだろうと思い覗き込むと地震で出来た小さなヒビでした。Tさんにとっては小さなヒビや地面にできた亀裂などまだまだ「普段通り」ではなかったのだと、その時に気付きました。Tさんの中では大きな変化であり、まだ不安の中にいるのではないかと考えるようになりました。

「復興」とは全てを元通りに戻すことではありません。環境面の整備をはじめ、小さな変化、混乱に気付き傍に寄り添い、その状況を乗り越える支援をすることこそが、私達の行うべき「復興」であると強く感じました。

「三気の里　熊本地震報告集」より一部抜粋

今年の4月で熊本地震の発生から7年が経ちます。

日々の忙しさに追われて、当時のことをふり返る機会も随分と少なくなってきました。コロナ、コロナと言いつつも、当時のことを振り返ると、少しだけ今を頑張れます。あの時の経験、感情や想いを改めて掘り起こして、毎日を当たり前に生活できていること。働けていること。「当たり前」への感謝を忘れずに、色々なことを頑張ります。

人材確保委員会

「売り手市場」

部長　松本　慎太郎

商品を買う側は「買い手」、商品を売る側のことを「売り手」と呼び、新卒採用の場では、学生を採用する企業を「買い手」、学生を「売り手」と表現しています。「買い手市場」とは、就職したい学生の数よりも採用したい企業の数のほうが少なく、企業にとって優位な状況のことで、「売り手市場」は、就職したい学生の数に対して採用したい企業の数のほうが多く、学生側が優位な状況と言われています。コロナ禍により一時は「買い手市場」となっていましたが、現在は「売り手市場」に戻っています。

福祉においても、常に人手不足の状況で、経済の動向にあまり左右されずに「売り手市場」が続いていますし、今後も続くと思われます。さらに「売り手市場」に拍車がかかると思われるため、魅力ある職場にして、離職者を減らし、学生などに気に留めてもらえるような企業努力が不可欠となっています。福祉の専門性や事業所として大切にしているモノは大事にしつつ、今の世の中にあった採用活動と、人材育成を目指していければと思います。

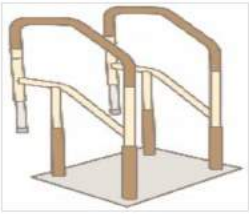
危機管理委員会

「役割」

主任　佐藤　和也

危機管理委員会では利用者さんを取り巻く環境において存在する様々なリスクを予測し見極めて、事故の発生前に改善、回避することが重要であると考えています。日常の業務から垣間見える様々な「事故の芽」を摘むために、全体へ周知していくことが本委員会に与えられた重大な責務であると考えています。

近年の情勢は不安定であり、新型コロナウィルスや災害は利用者さんの生活に大きな影響を与えました。10年前にこのような社会を誰が予測できたでしょうか。それでも利用者さんの「普通の生活」を守っていく為に試行錯誤し、時代や社会に合わせた暮らしを提供しています。今の世の中を「乗り越えて暮らしてる」ことを強みとして、今後利用者さんの生活に及ぼすリスクを回避する知識や技術を身につけていきたいと思います。



相談支援事業所

「意思受信能力」

相談支援専門員　柚留木　勝久

あるご家族の面談を行った時の事です。そのご家族のお子様はまだ幼く、自分の気持ちや目標を伝えることが出来ませんでした。その時傍にいた2人のお兄様が「〇〇ちゃんはお絵かきが上手だよ。」「手洗いも上手だよ。」と色々なことを教えて下さいました。この日は沢山の長所や好きなことが聞けて、とても幸せな気持ちになりました。

私事ですが、先日意思決定支援についての勉強会に参加しました。意思決定能力は、本人の個別能力と支援者側の支援力が必要とされています。そして支援者側の支援力の一つで「意思受信能力」という言葉が出てきました。意思受信能力を高めるためには、『聞く力』『感じる力』『気づく力』『共感する力』そして相手の思いを『言葉にする力』が必要と言われています。この話を聞き、私は面談で妹さんのことを一生懸命話して下さったお兄様方が思い浮かびました。私もこのご兄妹の様に寄り添いながら、相手の方の思いや長所を理解し言葉に出来るよう精進していきたいと思います。

3月スケジュール

2日（木）芸術クラブ・1班給料外出
7日（火）避難訓練
9日（木）2班給料外出
11日（土）イベント食
15日（水）誕生日会
16日（木）嘱託医来診
　　3班給料外出
17日（金）ゴールドクラブ・アンパの日
23日（木）さんきマーケット
24日（金）大掃除・次年度会議
25日（土）スタッフ研修
30日（木）4班・5班給料外出・理事会
毎週月曜日　訪問理容サービス

BeTREE
＜営業時間＞
8:00～18:00

betree314

GHはじめ

「365歩のマーチ」

世話人　金丸　綾子

GH利用者の皆さんは、夕方に帰ホームされてから就寝までの間、お風呂の用意や洗濯物畳などを行っています。毎日同じ日課の繰り返しのようで、同じではありません。利用者の皆さん一人ひとり、色々な変化が見られます。食事を慌てて掻き込んでしまう日があれば、ゆっくりよく噛んで食べられる日もあります。スリッパを並べることが出来ない時があれば、自らスリッパを並べることが出来る時もあります。休日には、居室掃除の際に、掃除機や床モップを上手に使用して掃除に取り組まれる方もいらっしゃいます。

私が驚いたのは、洗濯物畳みは難しいと思っていた利用者さんが、実は畳み方をマスターしていた事でした。毎日繰り返し、少しずつ積み重ねていくことで、色々なことが出来るようになるのだと知ることが出来ました。私も、これからもっと利用者の皆さんが出来る事が増えて、一緒に「やったね」と喜び合えるよう、寄り添って行きたいと思います。

沢山のご厚意
ありがとう
ございます

【寄付】
三気の里家族会様
米村　秋江様

【物品】
櫻木　房江様　金森　保様
坂梨　清美様　春野　宗敏様
逸見　友子様　清田　栄一様
森川　琇介様　櫻木　勇夫様
米村　秋江様　中村　秀隆様
魚谷　秀文様　小牧　博則様
田中　満子様　藤本　栄之助様
宮本　眞一様　千田　みゆき様
渡邉　正司様　東坂　富士代様
松村　俊介様　井手上　昌子様
美光産業様

【後援会】
魚谷　秀文様　前田　克英様
甲斐　真史様